



# の首は豆腐か?

45年間にわたってさまざまな事故を解析し、

真実を追求し続けてきた交通事故鑑定人、駒沢幹也氏。

偽装事故や保険金詐欺など、その道のプロによる悪質な事件も数多く扱ってきた。

最近の事故で最も多いのは「むち打ち症」だ。

この病気も、交通事故を食い物にする人たちに「ごちそう」として狙われてきた。

# ち症は現代のはやり病

ジャーナリスト 柳原三佳

「追突されたらとにかく首を押さえて車を降りること」「運転を始めるようになってから怖いよ」と、率先して話すようにななく耳にした。

衝突事故を起こすと、それが負う人が多いといわれている。頸椎捻挫型、神経根症型などその分類にはいくつかあるが、目に見える外傷はない、本人にしか分からない頭痛やしびれといった不快な症状が続くらしい。

実をいうと、私もむち打ち絡みの事故を起こしたことがある。走行中の車に後ろから追突してしまったのだ。

「しまった」と思つてすぐに停車すると、前の車から男性が、首を押さえながら「痛い」といつて降りてきた。

事故の原因は、一方的に私のほうにある。翌日、その男性も助手席の女性も「むち打ち症」で全治一ヶ月と診断された。幸い、トラブルらしいトラブルは起こらなかつたが、それ以来私の中では、「追突=むち打ち」という固定式が、完全に現実のものとな

った。そしていつしか、「追突って、むち打ちになるから怖いよ」と、率先して話すようになっていた。

ちなみに、一九九一年に自動車に乗つていて負傷した人は四十五万四千七十八人。頸部（首）に主な傷を負つた人が二十七万七千四百七十四人、全体の六一%を占めている。つまり、事故でけがをした五人のうち三人が、首を痛めているということになる。

「へえ、それでアンタの車はどの程度つぶれたんだい」ひょんなことから私が体験談を始めると、交通事故鑑定人・駒沢幹也氏は、そんな質問を投げかけてきた。

「フロントのバンパーが少しへこんだ程度です。相手の車もそれほどひどいつぶれ方はしていませんでしたね」と

すると駒沢氏は、ハハハと笑い出した。

「そんなりやむち打ちにはならないよ。それが証拠に、車がグシャツとつぶれて死ぬか生きるかっていう事故では、ほとんどむち打ちでも

# 日本人

## むち打

「むち打」がしてくるだらう。むち打ちは他覚症状がないから、医者も患者の言いなりに診断するしかないんだ」

実際、交通事故裁判では、むち打ちの絡んだ事件がとても多い。もちろん、なかには本物のむち打ちもある。ただしこれは、車の損傷を見ても十分納得でき、また、被害者の治療期間や日常生活も極めて常識的だといふ。

打ちつてのは事故直後に首は痛くならない。学説によると早くても一~三時間たつてから症状が出るものなんだ」

しかし、あの事故では、確かに「むち打ち症」という医師の診断書が出ていた。私が納得できずにはいると、駒沢氏はこう付け加えた。

「追突されたり、むち打ちはなる。日本人はみんなそういう思い込んでるから、いきぶつけられると、たとえ悪意のない人でもそんな気になってしまふんだらうね。あんただつていま、体のどこか重苦しいとか変なところはないかい? そう聞かれたら、だんだんそ

めることがないだらう? もるのはどれもこれもあるかないかという損傷の場合に限られるんだ。それに、むち打ちつてのは事故直後に首は痛くならない。学説によると早くても一~三時間たつてから症状が出るものなんだ」

しかし、あの事故では、確かに「むち打ち症」という医師の診断書が出ていた。私が納得できずにはいると、駒沢氏はこう付け加えた。

八四年九月X日、午後四時じる。自営業者Wは、軽トラックで品物を納品した帰り、岡山県H郡の細い山道を走つて自宅を目指していた。

ちょうど上りの左カーブにさしかかったとき、対向車が近づいていることに気づいたWはその場で停車、対向車を先行させようと、ギアは二ユートラルのままブレーキを少しすつゆるめ、惰性で車を約一㍍バックさせた。

そのとき、後ろからクラクション、と同時に「コーン」という音がした。後ろから来

ていた車にバックしながらぶつかってしまったのだ。

「けがはありませんか」Wはあわてて車から降り、後ろの車に駆け寄った。

その車には、運転していた女性(1)とその母親(5)、長女(4)、長男(3)が乗っていたが、四人ともけがはないと言った。そこで、二台は物損事故の届けを出し、警察官に事故の状況を説明して別れたのだった。

事故車の写真を見せてもらつた。ヘコミらしいヘコミはほとんど見当たらない。私



前から「追突」された乗用車。ボンネットが歪んだ  
事故現場はゆるい左カーブの上り坂だった 下

いちばん驚いたのは加害者のWだったに違いない。自分の過失を全面的に認めていた彼は、事故から二日後、「被害者」の自宅を訪ねた。応じたのは、被害者の内縁の夫だった。彼は、いきなり四人の

は、なぜこの事故が裁判にまで至ったのか、とつさに想像することができなかつた。

「そりや不思議に思うだろう。事故車を見ても、あるのは小さな古キズばかり。やつと見つけたキズから鑑定したところ、衝突速度はせいぜい時速三・五キロだからね。ところが、四人の『被害者』はその後どうなつたと思う? 事故の翌日『むち打ち症』と診断されて四人全員入院したんだ」

社に顔が利くはずだ」と、強圧的な態度で示談を迫ってきたのだ。おまけに至急いくらかのカネを用意してくれという。単なる物損事故と思い込んでいたWは途方に暮れて、再び保険会社に相談

診断書をWの目の前に突きつけると、「全員むち打ちで、入院は最低二週間。へたをすると、完全に治るまでに三年かかるかもしれないそうだ。とにかく、病院では個室に入れて、付き添いも付けてくれ。入院費と、女房が経営しているスナックの休業保証を七ヶ月分払ってくれるなら、示談に応じてやろう。二十万も出して弁護士に依頼すれば早く解決するし、議員に頼めば保険会

海外の雑誌300紙、雑誌1,800誌を最も速く確かに、  
経済的に輸入できるのが  
OCSです。OCSは、35年の  
伝統をもつ海外新聞  
普及(株)の略称です。

# 世界各地から日本へ。

# OCS

## 海外新聞普及 株式会社

本社: 〒108 東京都港区芝浦2-9  
購読課 ☎ (03) 5476-8131  
輸入第1課 ☎ (03) 5476-8101  
販売課 ☎ (03) 5476-8111  
大阪支社: 〒555 大阪市西淀川区  
野里3-1-14 ☎ (06) 473-2631  
名古屋営業所: 〒460 名古屋市中区  
丸の内2-7-17 ☎ (052) 203-5411

を入れた。

駒沢氏は語る。

「『被害者』の夫は西日本ではかなり大きな暴力団の組員だった。たぶん妻から事故の話を聞いて、棚からぼた餅、

とばかりに飛びついたんだろう。とりあえず警察には物損事故で届けておいて、数日たってむち打ちでごねる。バレてもともと、当たればガッポリというわけだ」

## バレてもともと当たれば…

闇いは始まつた。四人の「被害者」は警察の発行した事故証明書と「頸椎捻挫」と書かれた診断書、そして「頭痛、耳鳴り、手のしびれ」といった自覚症状を理由に、長期入院を続けた。そして、四人合わせて約六百万円の損害賠償を請求してきた。

一方、加害者であるWは、「コツンといくくらいの衝突で入院するのは不自然だ」

と主張し、駒沢氏に事故の解析を依頼した。駒沢氏は車の傷を細かく拾い出し、五十二歳にわたる鑑定書の中で、この衝突でどの程度の加速度が働いたのか、またそのとき搭乗者はどのような動きをするのかを分析した。さらに、その鑑定結果をもとにして、法医学の専門医にも医学鑑定を依頼し、「この事故の衝撃では、むち打ち症を盾に、判決までの六年間ごね続けた被害者たちは結局、駒沢氏の緻密な鑑定の前に敗れた。

打ち症にはなりません」という結論を出した。

事故から六年、ようやく裁判は終わった。一審は「被害者は入院する必要がなかった」としながらも、逸失利益や慰謝料など合計百五十万円の損害を認めた。しかし二審は、それを覆し、全額を返還せよという判決を下した。

二審の判決文は駒沢氏らの鑑定書をほぼそのまま引用している。

「駒沢幹也作成の鑑定書及びK作成の医学鑑定書によれば、本件事故により生じた加速度は時速約三・五キロ」と推認され、これを覆す証拠はない。自動車の衝突によって乗員に頸椎捻挫が生ずる加速度

の下限は、追突された場合で約二G（衝突速度は時速約十

五キロ）とされているが、本件のように前方からの衝撃の場合はこれより大であること、

訴訟を起こし、すべて勝訴した。

その大半はむち打ちによる過剰な賠償請求を取り消すものだったという。

むち打ちにかかる治療日数は地域や職業などにも関係しているとのコメントも、取材中、いくつか耳にした。

「むち打ちと診断されても、まとめて働いている者は、常識的な治療期間できつさと職場に帰つて行く」（駒沢氏）

「通院日数で比較すると、活気のある都市ではなく、不景気な経済地盤のところほど

日本から世界名地へ。  
お申し込み、お問い合わせは最寄りの営業所へご連絡ください。

**DCS**

**海外新聞普及株式会社**

営業所 日本橋 (03) 5640-2360  
新宿 (03) 3369-7477  
横浜 (045) 201-1177  
木 (0463) 90-1240  
厚木 (053) 475-9131  
京都 (075) 662-5081  
大阪本町 (06) 271-4590  
神戸 (078) 271-9129  
島根 (082) 244-1335  
福岡 (092) 473-2044